

ネットいじめに関する要因分析

-2018年度の全国の高校生のアンケート調査から-

Factor analysis on cyberbullying

- From a questionnaire survey of high school students nationwide in 2018 -

田代光輝/Mitsuteru TASHIRO †

† 多摩大学情報社会学研究所 Kumon Center, Tama University

[Abstract]

This study analyzes the characteristics of students who have experienced cyberbullying within the past year compared to those who have not experienced cyberbullying from a questionnaire conducted for high school students. As a result of the analysis, there were no significant differences in study likes and dislikes, grades, study time, and career paths. On the other hand, students who have experienced cyberbullying spend a lot of time using smartphones, have many Twitter accounts, have few friends at school, and have many friends they met on the Internet, and feel that school is an uneasy place. According to the analysis of this study, there is no significant difference in the learning situation if there is an experience of cyberbullying, but there is little interaction within the school and there is a tendency for the interaction on the internet to be active.

[キーワード]

ネットいじめ スマートフォン ネット友達 勉強時間 LINE Twitter

1. はじめに

本研究は、高校生を対象に行ったアンケートから、調査時点から過去1年以内にインターネット（以下：ネット）を通じたいじめ（以下：ネットを通じたいじめを“ネットいじめ”）の被害経験（以下：ネットいじめの被害経験を“被害経験”）にどのような特徴があるか分析をした。

被害経験がある生徒（以下：被害経験有り）を、被害経験の無い生徒（以下：被害経験無し）と比較すると、被害経験有りは勉強の好き嫌いや成績、勉強時間や進路などには有意な差が見られなかった。一方で、スマートフォン（以下：スマホ）の利用時間が283.10分/日と被害経験無しの223.70分/日より59.40分/日ほど長く、Twitterのアカウント数は2.61個と、被害経験無しの1.96個よりも1.07個ほど多い傾向にある。学校内の友達人数は11.54人で、被害経験無しの16.08人よりも4.54人少なく、ネット経由で知り合った友達が22.25人と、被害経験無しの10.28人よりも2倍以上多い傾向があった。学校生活での満足度や担任への信頼度には有意な差はみられないが、学校を不安な場所だと答える割合が高い傾向があった。

本研究の分析では、被害経験有りは、学習状況などには有意な差はないが、学校内での交流が少なく、ネット上での交流が活発である傾向があることが分かった。

2. 先行研究とその課題

2.1. ネットいじめの定義

いじめとは、いじめ防止対策推進法では“「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等、当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。”としている。また、この文中から、ネットいじめを、いじめの中で「ネットを通じて行われるもの」としていると読み取れる。

本研究ではネットいじめをいじめ防止対策推進法の定義に従って取り扱うが、分析に使った設問は4.1にて定義する。

2.2. ネットいじめの先行研究

ネットやスマホの普及により、ネット経由でのコミュニケーションが増加し、それに伴うネットいじめ含めたネ

ットトラブルも増加している。総務省の平成30年度版情報通信白書 [1]によれば、ネットの利用時間は、2013年が77.9分であったが、2015年は90.4分、2017年は100.4分と増加した。10代に限っていえば、2013年は99.1分であるが、2017年に128.8分になっている。また平成29年度版情報通信白書 [2]によれば、2012年からの継続調査として、代表的な SNS の利用率にも大きな変化がある。LINE や Twitter は 2012 年度では利用率が 38.8%と 26.6%であったが、2014 年度は 77.9%と 49.3%、2016 年度では 79.3%と 61.4%と大きく増加した。一方で、mixi や Mobage、GREE は 2012 年度 26.6%、26.6%、23.0%であったが、2016 年度では 2.9%と、6.4%、3.6%と、大きく減少している (表 1)。

表 1 情報通信白書平成 29 年度版 代表的 SNS の利用率の推移

	2012 年 (N=139)	2013 年 (N=139)	2014 年 (N=140)	2015 年 (N=139)	2016 年 (N=140)
6 つのいずれか利用	54.7%	74.1%	78.6%	81.3%	81.4%
LINE	38.8%	70.5%	77.9%	77.0%	79.3%
Facebook	19.4%	22.3%	25.0%	23.0%	18.6%
Twitter	26.6%	39.6%	49.3%	63.3%	61.4%
mixi	26.6%	8.6%	3.6%	2.9%	2.9%
Mobage	26.6%	14.4%	10.7%	8.6%	6.4%
GREE	23.0%	14.4%	7.1%	2.2%	3.6%

高橋はネットいじめ研究の検討 [3]として、ネットいじめ関連の論文数などに注目して分析した。高橋によれば、ネットいじめ研究は2016年から増加傾向にある。

三枝らはネットいじめの実態分析 [4]として、ネットいじめは電子メールを利用したものが多く、匿名性や広域性があり、被害者と加害者は従来のいじめとはほぼ同等で、従来のいじめの炎上線上にあるものとしている。小出らは、ネットいじめの傍観者の分析 [5]、ネットいじめの目撃は22.0%で、主にTwitter (67.0%) で行われているとした。傍観者の73.6%は目撃した時に何もしていない。仲裁行動には社会的自己制御 (SSR) が必要で、SSR を伸ばすことでいじめの深刻化の抑制・停止ができるとしている。三枝らの研究は2011年、小出らの研究は2017年である。この6年の間に、ネットいじめの主な舞台が電子メールからTwitterに移行したと考えられる。

青山は、ネットいじめと引きこもりの関連 [6]を高校生と大学生に調査を元に分析し、いじめ被害と引きこもりの親和性には正の相関があることをしめた。また若本らは、ネットいじめの加害・被害・傍観の心理的要因 [7] を、高校生を対象として調査し分析した。若本らは、ネットいじめについて、傍観行動と心理的要因を検討したが、傍観行動には心理的要因には弱い相関がみられたのみで、直接的な要因はみられなかった。一方、加害については、心理的距離と同調性、自尊感情には有意な結果が見られたとしている。

海外事例の研究・報告としては National Center for HIV/AIDS の The national Youth Risk Behavior Survey (YRBS) [8]によれば、ネットいじめ (Electronically bullied) の割合は、2011年は16.2% 2013年は14.8% 2015年は15.5% 2017年は14.9%となっている。今出は、米国でのネットいじめ対策 [9] を分析し、いじめが社会問題化したのは1999年のコロラド州コロンバイン高校で起こった、いじめの報復としていじめ被害者が銃を乱射した事件がき発端であるとしている。ネットいじめは2006年のミズーリー州で起きたミーガン事件から注目され、ネットいじめは2016年には33.8%が被害を受けており、年々増加している。さらに連邦政府や州などで対策が進んでいることも紹介している。

その他、ネットいじめに関連する研究として、加藤ら [10]、日野 [11]、北島 [12]、西口ら [13] の研究がある。

3. 検証内容と調査方法

3.1. 本研究での検証内容

先行研究では、ネットいじめは、2011年の三枝らの研究 [4]では電子メール、2017年の小出らの研究 [5]ではTwitterで多く行われているとしている。ネットサービスはサービスの移り変わりが激しく、常に移り変わる可能性がある。本研究では、2018年度において、ネットいじめがどのサービスで行われているかを調査する。また、悪口やかからかいなどに合わせて、当人だけメッセージを送らないネット上での無視や、グループトークから意図せずにはずされるグループ外しなどの実態も調査する。

その上で、被害経験のあるグループ (被害経験有り) と、被害経験のないグループ (被害経験無し) に分けた

上で、学習環境や学校等の生活環境、ネットの利用状況、ネット上のコミュニケーション状況などの違いについて分析する。学習環境や学校等の生活環境については、これまで執筆者が行ってきた調査(関連論文 [14][15][16])の分析過程でできた仮説である。ネットトラブルは、スマートフォンの利用時間が多いと、被害頻度も高くなる傾向がある。例えば、大学進学層よりもそれ以外の層がスマートフォンの利用時間が長く、トラブル経験の頻度も高い。大学進学層は勉強時間が長く、自由時間が短い傾向があるため、自由時間と相関するスマートフォンの利用時間も短い傾向にある。勉強の好き嫌いや、成績の良い悪い、進路や予備校等への通学日数など、学習環境の差が被害経験と関連するか分析する。

合わせて、青山の研究や、若本らの研究を参考にし、被害経験の有無による、ネット経由での交流の違いを分析する。被害経験有りは学校やネット上での交流に差があるか、またその交流の内容や、ネットの使い方などに差があるかを分析する。

3.2. 調査内容と概要

本研究における調査内容と概要は以下である。

3.2.1. 調査方法

本研究では、全国の高校生にアンケート調査を行った(以下:本調査)。調査方法は、RISTEXのプロジェクトとして、株式会社スポーツ・インフォマ・ジャパンの協力を得て、全国(北海道・宮城・東京・千葉・愛知・大阪・広島・福岡)の高校19校で行った。具体的な調査方法は、アンケート用紙を学校の教室内で教員から配布し、生徒はその場で回答を記入、記入後に専用の封筒でその場で封緘し、学校毎に取り纏めて集計場所へ郵送した。集計場所でデータ化し、そのデータを多摩大学情報社会学研究所で受け取って、分析を行った¹。

尚、いじめなど内心に関わる設問もあるため、アンケートの冒頭に答えたくない設問には回答しないでいい旨を記載し、もし、いじめなどで悩んでいる場合には、速やかに、スクールカウンセラー等に相談するよう促した。

3.2.2. 本研究で利用した質問

本調査で集めたデータのうち、本研究で利用した設問は以下である(文末のカッコ内は本研究における略称)。本研究は2018年度、2019年度と2回行ったパネル調査のデータのうち、2018年度のデータを利用した。²

- Q4 あなたは勉強が好きですか。(以下:Q勉強好き)
- Q5 あなたの学校での成績は、学年の中で順位をつけるとすると、どれくらいであると思いますか。(以下:Q成績順位)
- Q6 あなたが今考えている、卒業後の進路は、つぎのどれですか。選択肢からあてはまるものを(以下:Q希望進路)
- Q9 あなたには、お互いに卒業後も付き合っていきたいと思っている親友が、同じ学年に何人いますか。(以下:Q学校友達)
- Q10 あなたは、今通っている学校での生活に対して満足していますか。(以下:Q学校満足)
- Q11 あなたは学校のクラブ活動・部活動を、週あたりどのくらいやっていますか。(以下:Q部活日数)
- Q12 あなたは学校以外で、1日あたりどのくらい勉強していますか。(以下:Q勉強時間)
- Q15 あなたは学習塾や予備校に通っていますか。(以下:Q塾日数)
- Q16 あなたにとって、今通っている学校は、安心できる場所ですか。(以下:Q学校安心)
- Q17 あなたにとって、今通っている学校の担任の先生は、信頼できる人ですか(以下:Q担任信頼)
- Q18 あなたにとって、自宅は、安心できる場所ですか。(以下:Q自宅安心)
- Q21 あなたはふだん、スマートフォンや携帯電話を1日どれくらい使っていますか。(以下:Qスマホ時間)
- Q22 あなたが利用するスマートフォンや携帯電話サービスの、1日当たりの利用時間を教えてください。③ゲームをする時間(Qゲーム時間)
- Q23 この一年間に、スマートフォンや携帯電話で利用できるサービス(LINEやTwitterなど)を使っていて、このようなことはありましたか。
- ① 新しいクラスで友達が増えた(以下:Q友達増加)
- ② 離れた友達と仲の良い状態が続けられた(以下:Q友達維持)
- ⑦ 悩みが解決した(以下:Q悩み解決)

¹ データは個人情報が含まれるため、多摩大学情報社会学研究所の研究倫理申請(tama2016-研究倫理-02)に従って取り扱った。

² 2019年度調査データは、現在内容を精査している段階のため、本研究では2018年度分のデータを利用して分析をした。2019年度調査データの精査が完了次第、本研究の成果を踏まえて、さらなる分析・研究を進める。

⑧ 同じ趣味の友達を得ることができた (以下: Q 趣味友達)

Q27 あなたは Twitter (ツイッター) のアカウントを、いくつ持っていますか。(以下: QTWA 数)

Q28 あなたには、インターネット (SNS やネットゲーム、掲示板など) がきっかけで知り合った友達が何人ぐらいいますか。(以下: Q ネット友達数)

Q31 現在、一番親密になった人はどのような人ですか。(以下: Q 友達属性)

Q32 現在、一番親密になった人は信頼できる人でしたか。(以下: Q 友達信頼)

Q35 この質問は確認用です。かならず右の欄に 2 と記入してください。(以下: Q 確認設問)

Q38 あなたは、この 1 年間に、以下: Q にあてはまることがらをされたことがありましたか。

⑧ インターネット上で悪口を言われた (以下: Q ネット悪口)

⑨ インターネット上でからかわれた (以下: Q ネットからかい)

⑩ 自分にだけメールやメッセージを送られなかった (以下: Q ネット無視)

⑪ 自分だけが仲間はずれにされたグループをインターネット上に作られた (以下: Q グループ外し)

3.2.3. 回答数と属性

本調査の回答数は 6,082 人で、そのうち Q 確認設問に「2」と記入した 5,845 人を抽出した上で、重回帰分析の対象になる質問で、空欄になっている回答を削除して本研究のデータベースとした。有効回答数は 5,528 人で、回答した学年と性別は表 2 である。

表 2 アンケート属性

	男性	女性	総計
1 年生	1,452	1,778	3,230
2 年生	877	1,213	2,090
3 年生	153	55	208
総計	2,482	3,046	5,528

3.3. 分析方法

分析方法として、Q ネット悪口、Q ネットからかい、Q ネット無視、Q グループ外しのいずれかを、この 1 年間に経験したことがある 373 人と、それ以外の 5,155 人で傾向の差があるかを比較した (詳細は 4.1)。分析方法は、数を自由記入する設問 (Q 学校友達、Q 勉強時間、Q スマホ時間、Q ゲーム時間、QTWA 数、Q ネット友達) は重回帰分析、それ以外の設問は選択式の問題のためカイ二乗検定をした。

重回帰分析するにあたり、Q 勉強時間、Q スマホ時間、Q ゲーム時間については、平日と休日の利用時間をそれぞれ記述する形のため、平日を 5 倍、休日を 2 倍して 7 で割った上で、600 分を超える回答は 600 分に置き換えた。Q 学校友達と Q ネット友達も自由に数字を記述する形のため、Q 学校友達は 500 人、Q ネット友達は 100 人を上限として、それ以上の回答は 500、および 100 に置き換えた。Q ネット友達と QTWA 数は、ネット友達がいない場合や Twitter を利用していない場合などは解答欄が空欄になるため、空欄を 0 に置き換えて分析をした。

カイ二乗検定については、回答数の合計が 5,528 人いるため、箕谷の方式 [17] に従い、選択肢の回答割合を 1,000 分率にした上で検定作業をした。尚、本研究では重回帰分析、カイ二乗検定ともに、p 値が 5% 以下の場合で「差がある」とする。

4. 分析結果

4.1. この 1 年間で経験したネットいじめの被害経験

この 1 年間で被害経験は、Q38 の質問で、ネットいじめに関する質問として、Q ネット悪口、Q ネットからかい、Q ネット無視、Q グループ外しの 4 つの質問を利用した。

合計 5,535 人中、Q ネット悪口を経験した人は 245 人 (4.43%)、Q ネットからかいは 159 人 (2.87%)、Q ネット無視は 119 人 (2.15%)、Q グループ外しは 111 人 (2.01%) となっている (表 3)。被害経験のサービスごと詳細は表 4 である。Q ネット悪口と Q ネットからかいは Twitter が多く、Q ネット無視とグループ外しは LINE が多くなっている。これはオープン型 SNS の Twitter と、メッセージサービスの LINE のサービス形態の違いによるものと考えられる。

被害経験に対して、1つだけ「ある」と答えた数は201人、2つに「ある」と答えた数は117人、3つに「ある」と答えた数は19人、4つすべてに「ある」と答えた数は36人である（詳細は表5）。4つのうちいずれか1つでも経験した合計人数は373人で、有効回答数の6.74%で、14.8人に1人は何らかの被害経験があるといえる。この割合は、米国 [8]での割合の15%前後よりも少ない結果となっている。

表3 被害経験（複数回答可）

	Q ネット悪口	Q ネットからかい	Q ネット無視	Q グループ外し
この1年間に経験していない	93.68%	95.27%	95.97%	96.08%
この1年間に経験したことがある	4.43%	2.87%	2.15%	2.01%
空欄	1.90%	1.86%	1.88%	1.92%
合計(n)	5,535	5,535	5,535	5,535

表4 被害経験の詳細（複数回答可）

	Q ネット悪口	Q ネットからかい	Q ネット無視	Q グループ外し
Twitter	54.7%	44.7%	3.4%	3.6%
LINE	23.3%	26.4%	79.8%	81.1%
Instagram	9.4%	11.9%	1.7%	0.0%
その他	12.7%	17.0%	15.1%	15.3%
合計(n)	245	159	119	111

表5 被害経験の回答組み合わせ（あると回答したものが○）（複数回答可）

回答組み合わせ	Q ネット悪口	Q ネットからかい	Q ネット無視	Q グループ外し												
	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	○	
	×	○	×	×	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	○	
	×	×	○	×	×	○	×	○	×	○	○	×	○	○	○	
割合	27.1%	9.4%	10.2%	7.2%	17.7%	2.4%	4.0%	1.6%	0.5%	5.1%	1.6%	2.1%	1.3%	0.0%	9.7%	
合計(n)	373(母数を5,535とすると、6.74%が何らかのネットいじめを経験している)															

4.2. 被害経験の有無による各指標の差

被害経験の有無による、各指標の差は以下である。

4.2.1. 学習状況等に関する値の差

被害経験の有無による学習状況等（Q勉強好き、Q成績意識、Q勉強時間、Q進路、Q予備校）の差を検定した(表6)。Q勉強好きは選択肢の「1. 好き 2. やや好き 3. ふつう 4. やや苦手 5. 苦手」、Q成績意識は選択肢の「1. 良い、2. やや良い、3. ふつう、4. やや良くない、5. 良くない」の値を利用した。Q勉強時間は3.3において変換した値を利用した。Q進路は、大学進学希望者を1、それ以外を0として分析した。Q予備校は、通っている日数（0日～7日）の値を利用した。分析結果は表6である。各指標とも被害経験の有無による有意差はなかった

表6 被害経験の有無による学習状況に関する値の差

	全体		被害経験無し		被害経験有り		カイ二乗検定	重回帰分析			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	p 値	係数	SE	t	P 値
Q 勉強好き	3.48	1.10	3.48	1.09	3.50	1.19	80.02%				
Q 成績意識	3.25	1.14	3.24	1.14	3.42	1.22	43.27%				
Q 勉強時間	75.35	79.44	75.43	79.54	74.24	78.04		-1.20	4.26	-0.28	77.88%
Q 進路	0.66	0.47	0.66	0.47	0.62	0.49	47.21%				
Q 予備校	0.57	1.30	0.57	1.29	0.65	1.33	96.71%				

4.2.2 学校等の生活に関する値の差

被害経験の有無による、学校等の生活（Q親友人数、Q学校満足、Q部活日数、Q学校安心、Q担任信頼、Q自宅安心）に関する差を検定した（表7）。Q親友人数は3.3において変換した値を利用した。Q学校満足は選択肢「1. まったく満足していない、2. あまり満足していない、3. どちらともいえない、4. まあ満足している、5. ひじょうに満足している」の選択肢の値、Q学校安心、Q自宅安心は「1. とても安心できる場所だ、2. 安心できる場所だ、3. どちらともいえない、4. 不安な場所だ、5. とても不安な場所だ」の選択肢の値、Q担任信頼は「1. とても信頼できる人だ、2. 信頼できる人だ、3. どちらともいえない、4. 信頼できない人だ、5. とても信頼できない人だ」の選択肢の値を、Q部活日数は、1週間のうち部活をやっている日数の値を、それぞれ利用した。

Q学校満足、Q部活日数、Q担任信頼、Q自宅安心には有意差はなかった。Q親友人数は、被害経験無しが平均16.06人だが、被害経験有りは11.54人と4.54人少ない（P値4.50%）。分布（参考の図1）をみても、Q親友人数を0人～5人と回答する割合は被害経験有りの方が多く、11人以上と回答する割合は被害経験有りの方が少ない。Q学校安心は被害経験無しが2.39、被害経験有りは2.74で、被害経験有りの方が学校に対する不安感が強い（P値2.08%）。分布（参考の図2）をみても、「1. とても安心できる場所だ、2. 安心できる場所だ」は被害経験有りの方が少なく、「3. どちらともいえない、4. 不安な場所だ、5. とても不安な場所だ」は被害経験有りの方が多い。

表7 被害経験の有無による学校等の生活に関する値の差

	全体		被害経験無し		被害経験有り		カイ二乗検定 p 値	重回帰分析			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		係数	SE	t	P 値
Q 親友人数	15.77	42.23	16.08	43.05	11.54	28.23		-4.54	2.26	-2.01	4.50%
Q 学校満足	3.54	1.22	3.55	1.22	3.29	1.14	36.79%				
Q 部活日数	4.48	2.72	4.49	2.73	4.28	2.61	91.14%				
Q 学校安心	2.41	0.93	2.39	0.92	2.74	0.99	2.08%				
Q 担任信頼	2.23	0.97	2.21	0.97	2.43	1.05	40.09%				
Q 自宅安心	1.57	0.87	1.56	0.86	1.81	1.00	5.41%				

4.2.3 被害経験の有無によるネット利用状況に関する値の差

被害経験の有無による、ネット利用状況（Qスマホ時間、Qゲーム時間、Q友達増加、Q友達維持、Q悩み解決、Q趣味友達）に関する差を検定した（表8）。

Qスマホ時間、Qゲーム時間、は3.3において変換した値を利用した。Q友達増加、Q友達維持、Q悩み解決、Q趣味友達は、「1.この1年間に経験していない」は0、それ以外の経験有りの回答を1として分析をした。

分析の結果、Qゲーム時間とQ友達維持には有意差はなかった。Qスマホ時間は、被害経験無しが平均223.70分/日、被害経験有りが平均283.10分/日、被害経験有りの方が59.40分/日だけ長い（P値0.01%以下）（参考の図3）。スマートフォンを利用するメリットの項目のうち、Q友達増加は被害経験無しが平均0.73、被害経験有りが平均0.84で、被害経験有の方が0.11ほどとネットによる新規友達増加のメリットを受けている。Q悩み解決は被害経験無しが平均0.50、被害経験有りが平均0.67で、被害経験有の方が0.17ほどとネットによる悩み解決のメリットを受けている。Q趣味友達は被害経験無しが平均0.61、被害経験有りが平均0.79で、被害経験有の方がネットを通じて同じ趣味友達を作るメリットを受けている（メリットを受けたサービスの詳細は参考の図4～6）。

表8 被害経験の有無によるネット利用状況に関する値の差

	全体		被害経験無し		被害経験有り		カイ二乗検定 p 値	重回帰分析			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		係数	SE	t	P 値
Q スマホ時間	227.71	143.92	223.70	141.59	283.10	163.16		59.40	7.68	7.74	0.01%以下
Q ゲーム時間	56.16	85.40	56.03	85.43	57.97	84.94		1.94	4.58	0.42	67.24%
Q 友達増加	0.73	0.44	0.73	0.45	0.84	0.37	4.54%				
Q 友達維持	0.82	0.39	0.81	0.39	0.87	0.33	19.81%				
Q 悩み解決	0.51	0.50	0.50	0.50	0.67	0.47	0.75%				
Q 趣味友達	0.63	0.48	0.61	0.49	0.79	0.40	0.32%				

4.2.4. ネット上の交流に関する値の差

被害経験の有無による、Q ネット友達、QTWA 数、Q 親密属性、Q 親密信頼の差を検定した(表 9)。

Q ネット友達、QTWA 数は 3.3 において変換した値を利用して、重回帰分析をした。Q 親密属性は、選択肢の「1. 同性の年の近い人、2. 同性の年上の人、3. 同性の年下の人、4. 異性の年上の人、5. 異性の年の近い人、6. 異性の年下の人、7. わからない」をそれぞれ項目としてカイ二乗分析し、Q 親密信頼は、選択肢の「1. とても信頼できる人だ、2. 信頼できる人だ、3. どちらでもない、4. 信頼できない人だ、5. とても信頼できない人だ」のうち、4 と 5 の回答数が少ないため、4 と 5 の回答数を足してカイ二乗分析をした。

分析の結果、Q 親密属性、Q 親密信頼には有意差はなかった。Q ネット友達は、被害経験無しが平均 10.28 人に対して、被害経験有りは平均 22.25 人で、11.96 人多い(参考の図 7)。QTWA 数は、被害経験無しが平均 1.54 アカウントを所持しているのに対して、被害経験有りは 2.61 アカウントで、1.07 アカウント分多く所持している(参考の図 8)。

表 9 被害経験の有無によるコミュニケーションに関する値の差

	全体		被害経験無し		被害経験有り		カイ二乗検定 p 値	重回帰分析			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		係数	SE	t	P 値
Q ネット友達	11.09	24.57	10.28	23.73	22.25	32.12		11.96	1.31	9.15	0.01%以下
QTWA 数	1.61	2.03	1.54	1.96	2.61	2.70		1.07	0.11	9.92	0.01%以下
Q 親密属性	2.31	1.95	2.29	1.97	2.39	1.76	5.99%				
Q 親密信頼	1.84	0.86	1.84	0.85	1.87	0.89	12.35%				

4.3. 分析結果のまとめと考察

本調査の分析結果から、以下の様にまとめた上で、ネットいじめの状況を考察した。

4.3.1. ネットいじめの状況

ネットいじめの状況として、高校生は 1 年間でネットいじめの被害を 6.74% が経験している。経験として最も多いのが Q ネット悪口で 4.43%、続いて Q ネットからかいが 2.87%、Q ネット無視が 2.15%、Q グループ外しが 2.01%、である。

Q ネット悪口は Twitter が 54.7% で半数以上、Q ネットからかいも Twitter が 44.7% で半分近くを占めている。一方で、Q ネット無視は LINE が 78.9%、グループ外しも LINE が 81.1% と大多数を占めているが、これは、Twitter や LINE が 10 代の利用率が高い(2016 年度で 10 代の利用率は、Twitter が 61.4%、LINE が 79.3%) ことが基礎としてある。また、設問毎で割合が大きく異なるのは、多くの人に自分の考え方を拡散させる Twitter と、個別のコミュニケーション手段であるメッセージの LINE のサービス仕様による差と考えられる。

しかし、ネットサービスの利用率の移り変わりは早く、今後 Instagram や TikTok などが Twitter や LINE のような利用率になった場合、新たなネットいじめの形態が現れる可能性があると考えられる。

4.3.2. 被害経験有りの特徴

被害経験の有無で、各設問の回答割合を比較すると、学習意欲や成績、学校等の生活に関連する指標(Q 勉強好き、Q 成績意識、Q 勉強時間、Q 進路、Q 予備校、Q 学校満足、Q 部活日数)には有意差はなかった。分析をするにあたり、学習意欲がないとネット利用の頻度が高いため、被害経験が多いのではないかと仮説をたてたが、被害経験有りに、学習状況や学校での生活状況などで何らかの特徴があるとはいえない。言い換えれば、だれでも被害者になる可能性があると考えられる。

一方で、学校の生活状況に関わる設問とし、担任への信頼度には有意差はないが(Q 担任信頼)。学校を不安な場所だと考える割合も高くなっている(Q 学校安心)。被害経験によって学校への安心度が下がったと考えることも可能であるが、本研究ではこれらの因果関係までは分析できていない。

また、ネットの利用状況については、被害経験有りは、被害経験無しと比較して、スマートフォンの利用時間は 59.40 分/日ほど長い(Q スマホ時間)。ネットを利用した交流も、同じ学校のクラス友達の増加(Q 友達増

加、) や、学校内外の同じ趣味を持つ友達などを作る割合も多く (Q 趣味友達)、悩みなどをネットで相談して解決する割合も高い傾向にある (Q 悩み解決)。

学校内の親友は4.54人少なく (Q 親友人数)、ネット経由の交流は、Twitter のアカウント数が1.07 多く (QTWA 数)、ネット経由で知り合った友達の数も11.96 人多い (Q ネット友達)。本研究だけでは、因果関係までは明らかではないが、被害経験有りは、現実世界での交流よりも、ある程度ネット経由での交流に、親和性があると考察される。

5. まとめと今後の課題

本研究では、高校生へのアンケート調査を利用して、ネットいじめの被害者の傾向の一部を分析した。分析の結果、被害経験の有無では、学習意欲などには差がない。これは、だれでもネットいじめの被害者になりえる可能性を示している。

一方で、被害経験有りは、被害経験無しと比較して、スマートフォンの利用時間が長く、現実世界よりもネットで交流を持つ傾向であった。しかし、本研究は、因果関係を明らかにしたものではない。被害経験有りは、ネットいじめの被害の影響で、ネットに親和性をもった可能性もある。そのため、ネットいじめの抑制に、スマートフォンの利用制限が有効であるとは言い切れない。

また、本研究は、別途行っている神奈川県の高中生へのアンケート調査と設問を一部合わせていたため、先行研究にあるような内心に関わる設問や、ネットいじめの加害経験の設問を加えていない。また、ネットいじめの予防手段の考察につながる設問も設けなかった。今後、研究を継続するにあたり、これらを改善して、ネットいじめの予防手段の発見につながるような研究を進めていきたい。

謝辞

本研究は、JST、RISTEX、JPMJRX17G3 の支援を受けたものである。また、アンケート収集は、株式会社スポーツ・インフォマ・ジャパンの協力により実施しました。本研究を進めるにあたり、多摩大学情報社会学研究所の小松正客員教授にアドバイスをいただきました。文末になりますが、お礼申し上げます。

【参考資料 (グラフ)】

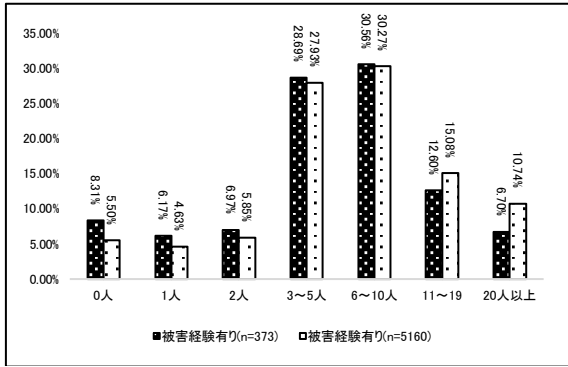


図 1 被害経験の有無と Q 親友人数の回答割合

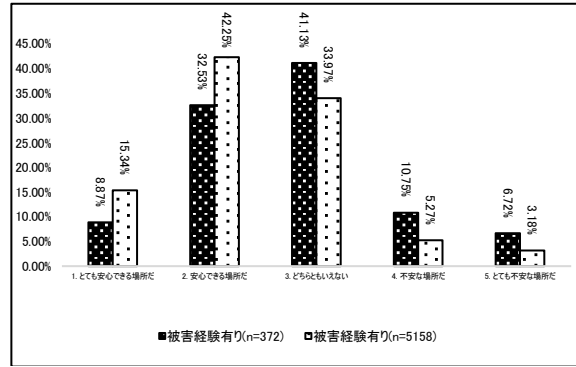


図 2 被害経験の有無と Q 学校安心の回答割合

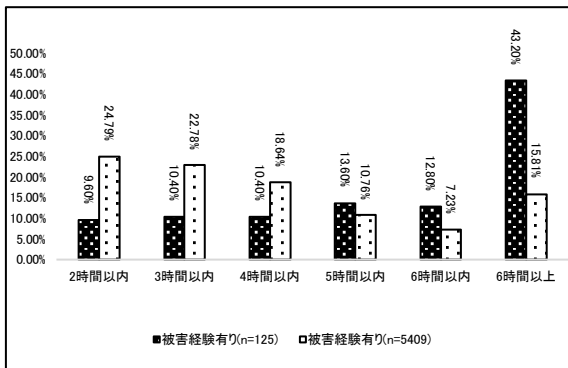


図 3 被害経験の有無と Q スマホ時間の回答割合

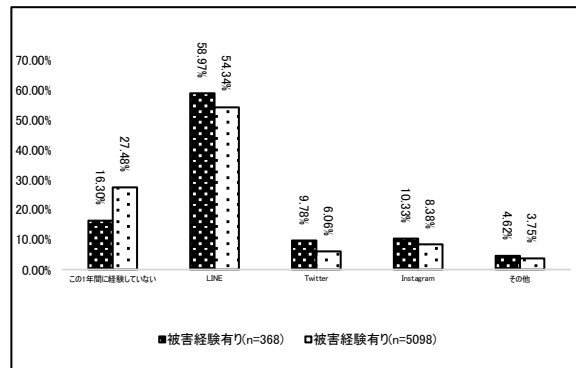


図 4 被害経験の有無と Q 友達増加の回答割合

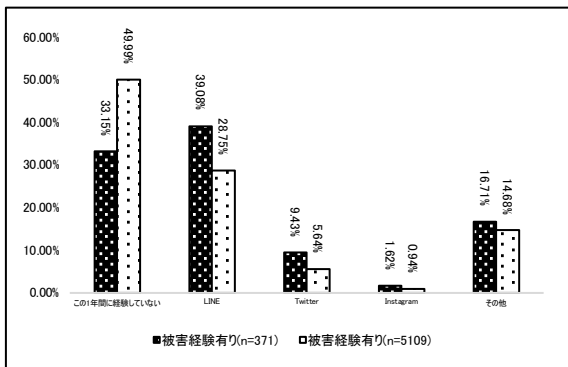


図 5 被害経験の有無と Q 悩み相談の回答割合

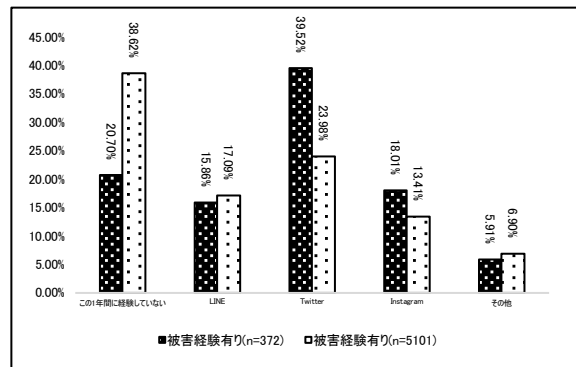


図 6 被害経験の有無と Q 趣味友達の回答割合

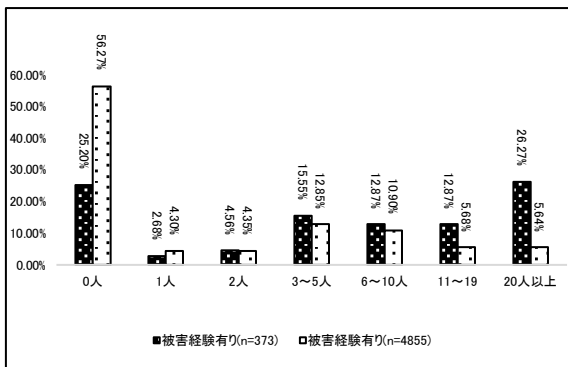


図 7 被害経験の有無と Q ネット友達の回答割合

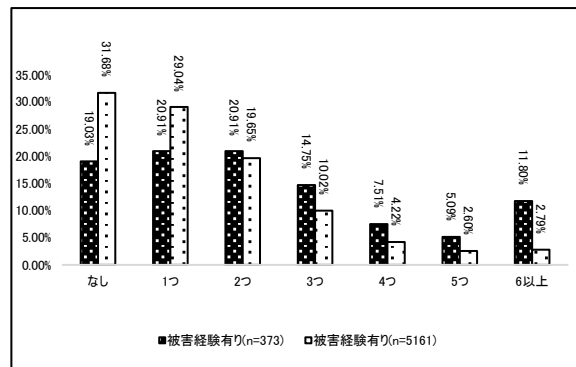


図 8 被害経験の有無と QTWA 数 (Twitter アカウント数) の回答割合

参考文献

- [1] 総務省, “平成 30 年度版 情報通信白書”, 総務省, 2018.
- [2] 総務省, “平成 29 年度版 情報通信白書”, 総務省, 2018.
- [3] 高橋伸彰, “いじめ研究の計量書誌学的検討” 佛教大学教育学部学会紀要 (18), pp17-29, 2019.
- [4] 三枝好恵, 本間友巳, “「ネットいじめ」の実態とその分析,” 教育実践研究紀要 (11), pp179-186, 2011.
- [5] 小出真奈美, 荒井信成, “ネットいじめにおける傍観者の自己制御と援助行動との関連” 白鷗大学教育学部論集 11(3), pp233-251, 2017.
- [6] 青山郁子, “高校生・大学生におけるインターネット・携帯電話依存、ネットいじめ経験とひきこもり親和性の関連,” 国際基督教大学教育研究 (56), pp43-49.
- [7] 若本純子 西野康代 原田恵理子, “高校生の LINE いじめにおける加害・被害・傍観行動と心理要因の関連-現実との連続性に注目して-,” 佐賀大学教育学部研究論文集 2(1), pp223-235, 2017.
- [8] National Center for HIV/AIDS, “Trends in the Prevalence of Behaviors that Contribute to Violence,” [オンライン]. Available: https://www.cdc.gov/healthyyouth/data/yrbs/pdf/trends/2017_violence_trend_yrbs.pdf. [アクセス日: 22 10 2020].
- [9] 今出和利, “アメリカにおける子どもの「ネットいじめ」(Cyberbullying)対策と憲法上の問題点—法と判例の動向,” 現代社会研究 2018 巻 16 号 pp75-86, 2019.
- [10] 加藤由樹 加藤尚吾, “情報の教諭を目指す学生を対象としたネットいじめに関する意識調査” 日本教育情報学会 年会論文集 (23), pp250-251, 2007.
- [11] 日野陽平, 林尚示, 佐野秀樹, “LINE におけるネットいじめと部活動におけるいじめの予防・早期発見に向けて教員がひつようとする支援: 小学校・中学校・高等学校への質問紙調査から,” 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 (71), pp451-467, 2020.
- [12] 北嶋健治, “「ネットいじめ」事件におけるインターネット利用の問題の顕在化について,” 早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究第 68 号 pp195-207, 2020.
- [13] 西口真央, “行動ログを用いたソーシャルメディアにおける未成年者のネットいじめ被害者の検知および特徴分析,” 人工知能学会全国大会論文集 JSAI2020(0), 1L5GS503-1L5GS503, 2020.
- [14] 田代光輝, 小松正, 浅子秀樹, “スマートフォン利用の生活時間への影響分析 —神奈川県および全国の高校生のアンケート調査から—,” 情報社会学会誌 Vol.14 pp25-34, 2019.
- [15] 田代光輝, 飯島 泰裕, “情報空間における“人のつながり”の分布の検証—カイ二乗検定を利用したべき分布と対数ポアソン分布の検定—,” 青山社会情報研究 vol9 pp24-41, 2018.
- [16] Yuichi Hirano, Fujio Toriumi, Mitsuteru Tashiro, Kiyotaka Eguchi, “Finding Minors Faced with Online Risk,” Journal of Transformation of human behavior under the influence of The Infosociomics Society Vol.3, 2018.
- [17] 養谷千鳳彦, 統計学の話 (第 4 版), 東京図書, pp257-266, 2002.

(2020 年 12 月 12 日受理)